

隷 属 娼 艦

アズル

~女性将官は恥辱に沈む~



二次元ドリームノベルズ

18 挿絵/氷室しゅんすけ

有機企画

試し読み版

第一話	決戦	006
第二話	肛虐に堕ちる副官	049
第三話	偽りの軍服	073
第四話	屈辱の壁尻輪姦	099
第五話	フタナリ快樂と虚ろな淫戯	123
第六話	婚約者と穢される身体	147
第七話	害虫駆除と新たな淫辱の幕開け	170
第八話	赤面のコスプレポールダンス	196
第九話	崩壊する世界	218
最終話	隷属娼艦	245

登場人物紹介

Characters



エリーカ・ ラーゲルフェルト

クラウディアの副官。根っからのクールな軍人気質で特に男性に対しては容赦がない。



クラウディア・ バルシュミーデ

宇宙戦艦アルタイルの艦長。幾度もグリードを打ち破ってきた美人将官。

ハラオ・マキムラ

宇宙戦艦アルタイルの乗組員。

グリード

人類と敵対している敵性宇宙生物。

第一話 決戦

「目標、左舷前方！ 高エネルギー砲斉射！」

絶対等級系八番艦、戦艦アルタイルから幾筋もの光が放射され、宇宙の闇を一際明るく照らした。

全長五四〇メートル、全高、全幅共に一〇〇メートルの巨大な船体は後部をすぼめた楕円形で、シロナガスクジラを思わせた。

周囲にはデブリの仲間入りを果たした味方の艦載機やミサイルの残骸が漂う。

「続いて防御シールド展開！ 前部を集中防御！」

「艦長、グリード艦隊の砲撃止まりません！ このままでは装甲が持ちません！」

「今エリーカがリンクシステムを起動しているわ。もう少しだけ持ちこたえて！」

ブリッジの艦長席から身を投げ出す勢いで、クラウディア・バルシュミーデが叫ぶ。

腰まで伸びたブロンドのウェーブロングヘアは、血なまぐさい戦場に咲く一輪の花のよう。戦火の中でも温かさを失わない美貌は聖母をイメージさせた。

胸にある二つの膨らみは白い軍服を大きく盛り上げ、艦が衝撃を受けることにタプンッ

タップンといやらしく弾む。キュツと細くくびれたウエストのラインも魅力的だ。

白い山脈に似たヒップは滑らかで、身動きみじろをするたびにフルフルと震えた。肉感的な太腿は黒のタイツに包まれ、タイトスカートの下では純白のショーツがじつとりと雌の芳香を漂わせる。

艦長という立場でなければ、無遠慮に声をかける男性乗組員が後を絶たないだろう。

(やはり戦力の差は歴然ね。間に合うといいのだけど)

人類連合でも稀有な女性艦長にして数え切れない勝利をあげた女傑の表情にも、今回はかりは焦りの色が見て取れた。

モニターに映るエメラルド色の円盤、グリードの艦隊による攻勢は激しさを増すばかりだ。

『グリード』、それは人類が惑星間での航行を可能にしてから初めて遭遇した知的生命体。星の資源を食い尽くして繁殖と移動を繰り返すイナゴ型のエイリアンである。

対話による相互理解が不可能だと判明すると、時間を置かずに戦争の火ぶたが切られた。未曾有の危機に対し地球人類は国家間のあらゆる問題を一時凍結。人類連合を結成し懸念な抵抗を続けていた。

戦艦アルタイルが主力の一端を務める現在の艦隊戦も、地球の命運を左右する重要な一

戦なのだ。

「ガガ、ガゴゴ」「ギギ、ギググググ」「ガゴ、ギゴゴゴ」

「グリード、装甲板に取り付き艦内への侵入を試みています！ 数は二十！」

「機銃掃射！ 一匹たりとも通さないで！」

オペレーターが悲鳴に似た報告を上げる。

短距離ワープを使ったグリードの部隊がアルタイルを捉えたのだ。装備は気泡のようなヘルメットのみ。ほぼ生身のままで宇宙空間を移動できる生存能力は驚嘆と言う他ない。

尾部からタコのような触手を伸ばして身体を固定し、コーティングされた装甲を頑丈な爪で切り裂いていく。

「艦長、艦内への侵入止まりません！ 対応が追い付きません！」

「シヨックパルスの起動を急ぎなさい！ 直掩部隊ちよくせん、これ以上グリードを近づけないで！」

個よりも群れを優先するグリードは一体一体が特攻隊員のようなもの。自軍からの砲撃も意に介さず侵入を優先する。

一つの目的に邁進する姿は同じ知的生命体でも人類とは根本的に異なる。

（エリーカ……まだなの）

クラウディアの額に玉の汗が浮かぶ。味方にこちらを援護する余裕はなく、このままで

は轟沈する可能性も十分にあり得る。

一秒が一時間のように感じられ、そして、ついに待ち望んだ声がモニターから聞こえてきた。

【お待たせして申し訳ありませんクラウド様。リンクシステムの準備が完了いたしました】

「——よく間に合わせたわね。それでは、星々を脅かす害虫を殲滅するわよ」

艦長席の背もたれが倒れ、クラウドの頭部にケーブルの接続されたヘルメットが装着される。内蔵機器が脳波を読み取り、声に出すことなく主人の意思を読み取る。

【メインコードを伝達。リンクシステム、起動！】

クラウドはシステムのロックを解除し起動させる。麗しき艦長の意識は電子の海に溶け、戦艦アルティールと一体化した。

【いくわよ、エリーカ】

【はい、クラウド様】

0と1の存在になった二人は言葉を交わし、瞬間、戦艦アルティールはその挙動と姿を一変させた。

無数の砲塔が剥き出しになりハリネズミのように船体^{へんぼう}が変貌する。外装は溢れ出る殺意

に彩られ、先ほどもまでの流麗な曲線など欠片かかけらも見当たらない。

【エネルギー砲斉射！】

「ギグッ!? ガ……ッ!?」「ゲ、ゲエギギ!」「ビビ、ジジジジイッ!?」

針に糸を通すような正確さで装甲板を傷つけることなくエネルギー砲が取り付いていたグリードを焼き払う。邪魔者を排除したアルタイルは艦尾メインスラスタを最大出力で点火させ、グリードの艦隊に突撃を開始した。

【前方からミサイル多数接近します】

【問題ないわ。すべて撃ち落とすから】

種子のようなミサイルを無数の高エネルギー砲が一つ残らず迎撃する。レーザーによる砲撃をピンポイント防衛シールドが弾く。

そして巨体からは考えられないスピードで、速度を落とすことなくアルタイルは敵艦隊のど真ん中に突入した。

【バレルロールを実行。主砲、四連大型高エネルギー砲発射準備完了しました】

【四連大型高エネルギー砲、てえ——ッ!!】

砲撃を避けるために螺旋らせん起動を描きながら、右舷と左舷に取り付けられた主砲塔が火を噴く。



敵艦は船体に大きな穴を空けるとオレンジ色に発光し、爆散した。

【このまま突っ切るわよ】

【回避、防御は私にお任せを。艦長は攻撃だけに専念してください】

通常の戦艦ならば絶対にあり得るはずのない、まるで戦闘機のような機動。これが人の力と艦の全機能を一体化させるリンクシステムの神髄。

グリードを打倒するために人類連合が開発した切り札である。

【クラウド様、残り時間が三分を切りました。そろそろ接続を解除するべきかと】

【了解したわ。動く兵装全部撃ちきってしまうわね】

リンクシステムは強力だが使用可能な時間は適合できる軍人で平均三分、並外れた適合率を持つクラウド様でさえ九分が限界だ。

無尽蔵と思えるほどにミサイルとビーム砲が斉射され、アルティルが進撃した後はグリード艦隊の残骸だけが残された。

生き残ったグリードもこれ以上の戦闘は不可能だと判断したようだ。

【敵残存戦力の撤退を確認。リンクシステムを解除します。クラウド様、お疲れ様でした】

「お疲れ様エリーカ。今回も助かったわ」

ヘルメットが外され艦長席が元に戻っていく。びっしりと汗をかいたクラウディアはホルダーに置かれたミネラルウォーターに手を伸ばした。

「ふう……なんとか切り抜けることができたわね」

肩を下ろし安堵の息を吐く。モニターには歓喜の声を上げ抱き合う味方の軍人たちが映っていた。



グリードとの艦隊戦から二週間後、補給を済ませた戦艦アルタイルは貴重なリンクシステムの戦闘データを持ち帰るために、地球に向けて針路を取っていた。

今回の戦果を考慮し、クラウディアにはさらに上の席が用意されている。

「昇進おめでとございます。クラウディア中将」

「まだ気が早いわよ、エリーカ」

ブリーフィングに向かうため、艦の通路を移動しながら二人は言葉を交わす。重力発生装置の影響で地上と変わらず軍靴が子気味よい音を立てた。

「体調に問題はない？ あなたにはいつも無理をさせているから」

「肉体の調整は万全です。お気遣いありがとうございます」

クラウディアとは対照的な黒の軍服に身を包み、恭しく答えるのは副官のエリーカ・ラ

ーゲルフエルト中佐だ。セミロングの銀髪は綺羅星にも負けない美しさを誇り、彼女が特別な存在だと喧伝していた。

自信に満ちた細面はメイクの必要がないほどに美しく、切れ長の双眸そうまゆうがクールなイメージを与える。張りのあるバストが軍服に形のよい曲線を描き、細くくびれたウエストは一流の体操選手のようなものである。

スラリと引き締まった太腿をタイツがより一層引き締め、その付け根では黒のレース下着が妖艶な色香を放つ。

まるで女優と見紛う美貌とプロポーションの麗人だが、任務遂行における非情さと女尊男卑は有名で、男性乗組員たちからは『鬼のエリーカ』と畏怖されていた。

「そう、よかったわ。あの艦隊戦でみんなかなり疲れているみたいだったから。特にあなたにはリンクシステムのサポートまでお願いしているものね」

「私が担当しているのは一部の機能に過ぎません。すべてのシステムを掌握しているクラウディア様には及びません」

「一部だって大変よ。回避や防御はほとんどあなたに頼っているんだから。それに、ゆくゆくはメインコードを引き継いで、わたしがいなくても平気になつてもらわないとね」

「恐れ入ります」

メインコードとは艦とリンクするために必要なパスワードだ。使用者の負担を減らすためにリンクシステムは複数人での使用が推奨されており、リンクする人数が増えるほど一人当たりの負担が軽減される仕組みだ。

ただし、メインコードには艦の制御にかかわる重要な情報が含まれるため、アルマイル内でコードの詳細を知っているのはクラウディアとエリーカしかない。

「もう、相変わらず真面目ね。わたしが上官だからつてそこまで畏^{かしこ}まらなくていいのに、気を抜くことも覚えないとみんなも萎縮してしまおうよ」

「しかし、私はどうにも気を抜くという行為が不得手でして。できれば善処したいのですが……」

「軽く笑顔をつくるだけでもいいのよ。緊張がほぐれるしみんなも安心するわ。ほら、こんなふうに」

「こ、こうでしょうか……?」

ニッコリと笑うクラウディアに合わせて、エリーカは赤面しつつ指で口角を上げる。アームレスリングだけで屈強な男を号泣させる中佐の貴重な姿だ。

「やはり上手くできそうにないですね。ご希望に添えず申し訳ありません……」

「じゃあ次までの必修科目にしておきましょうか。ふふ、これも任務よ」

「了解しました」

生真面目に返答する戦友の姿を見てクラウディアは微笑を浮かべる。

幾度となく共に戦場をくぐり抜けてきた仲間。彼女が今日も変わりなく生きていることが何よりも嬉しい。この世界で人の命など草花よりも儂いはかなのだから。

と、談笑する二人の前に通路を横切る形で男が現れた。

「くくく、よおく撮れてますねえ」

やせ型でメガネをかけた男性乗組員は独り言をブツブツとつぶやいていた。七三分けにした頭髮は薄く、ガイコツのようにくぼんだ瞳が根暗な印象を与える。

俯うつむいて手元の写真を見ているせいか周りの様子がわかっていないようだ。

「おい、貴様なにをやっている」

「ヒイツ!? え、ええエリーカ中佐!?!」

エリーカに気づき悲鳴のような声を上げたのはハラオ・マキムラ伍長。陰湿、怠惰、無能と評判の下士官でアルタイルの汚点と呼ばれる男であった。

「持っているのは写真か。私に貸してみろ」

「い、いえこれはプライベートなものでして。とても中佐にお見せできるようなものでは……」

「いいから貸せ」

「あっ!？」

マキムラの手から写真がもぎ取られる。そこに写っていたのは下着姿や裸体さらを晒す女性乗組員たちだ。背景を見るに女子更衣室で撮影したようである。

「貴様ア……軍人として恥ずかしくないのか！ このクズが！」

「ご、誤解です！ 虫型ドローン进行操作していたら偶然撮影してしまって、今処分するところだったんです！」

「つまりらん言い訳をするな。以前から更衣室で不気味な視線を感じるといふ噂はあったが……まさか貴様が犯人だったとはな」

「う、うう」

「このことは査問委員会に報告しておく。わかったらさっさと失せろ。蹴り殺すぞ」

銃剣のごとく鋭い眼光が突き刺さる。決定的な状況を押さえられ常人ならばスゴスゴと退散するしかない状況だが、マキムラはその場から動かなかつた。

ここで引けば犯罪行為が確定してしまい、地球で厳しい処分を受けることは間違いないのだから。

「か、艦長、どうか見逃してください！ 少し魔が差しただけなんです！ どうか……ど

うか僕を助けてください！」

「うーん……こうなったのは残念だけど犯罪を見過ごすわけにはいかないわ。しっかりと罪を償ってきなさい」

「そんな……」

人類連合の聖母と称えられる温和なクラウディアにまで見放され、絶望がマキムラの心を支配する。もつとも、子供じみた言い訳を重ねる三十五歳の男に、与える慈悲などあるはずもないのだが。

「お願いです！ お願いですから頼みますよ艦長！」

「ちよ、ちよつと落ち着いて」

マキムラは興奮した様子でクラウディアに手を伸ばす。頭が沸騰し自分の立場も考えられない。そして、その軽率な行動がエリーカの逆鱗に触れた。

「黙れ、クズが」

「——ガッ!? アぐアアアアアアアッ！」

手が触れる間際、タイツに包まれた足が跳ね上がり、マキムラのみぞおちに強烈なトキックが突き刺さった。

呼吸すらできないほどの苦痛に痩せた体躯が痙攣する。

「忠告はしたはずだ。それとも本当に蹴り殺されたいか？」

「うぐ、ぐううう……」

「ちよつとエリーカやりすぎよ」

「お言葉ですが、このタイプのクズは痛い目を見なければ反省しません。性根が甘ったれすぎています」

うづくまる姿を生ゴミでも見るような目で見下される。年下の女性に屈服させられる屈辱に声が出ない。

「クラウディア様、お急ぎください。ブリーフィングまでもう時間がありません」

「ごめんなさい。わたしたちは行くけど医務室に寄って治療を受けなさい。それからもうこんなことをしてはダメよ」

「次にまた同じことをするようなら睨丸を踏み潰す。わかったな」

「ぐ、ぐう……」

「返事は？」

「わかりました中佐……」

屈辱に悶える男を残し二人はその場から立ち去る。通路の死角で一連の出来事を見ていた生物がいるとともに気づかずに。

「くそ……あの女ども絶対に許さない。いつか必ず復讐してやりますからね……」

たっぷりと反吐を吐いてからマキムラは立ち上がった。倒れた際に打ち付けたのか唇は切れ、血が滲^{にじ}んでいる。

「女に生まれてきたことを後悔させてやりますよ……僕をこんな目に遭わせた報いを必ず受けさせてやります……」

小声でつぶやきながら通路を引き返して医務室に向かう。現実的に考えれば不可能だとわかっているのだが、口にしないと怒りでどうにかなくなってしまいそうなのだ。

『ギ、グギギ……、イイ……』

「なっ、だっ、だれですか!?!」

首筋にチクリとした痛みが走り、頭の中に声が響く。ノイズのような到底人間とは思えない声だが、なぜか意味は理解できた。異常事態に精神と肉体が一刻も早くこの場から脱出するように促すが、両足は張り付いたように動かない。

『ガギ……コレ、ゴカ。テヲ……セル』

「まさかお前が艦内に侵入を!? ぼ、僕をどうするつもりですか!?!」

『フク、ニ、チカ……ラ、ヲ、レロ』

「復讐に協力……僕に力を貸すと？」

『ジカ、ガイ。イエ……ス、ラケ』

「オレを受け入れる……口を開け……っ、うう」

かつてない恐怖に手も足もガクガクと震える。得体の知れない相手の言葉を信用するなご正気の沙汰ではない。

その一方で復讐心と未知の力への渴望は燃えるように沸き上がり、ハラオ・マキムラは一つの決断を下した。



「——ッ?! ど、どうしてあなたがここに!？」

クラウドディアは驚愕きょうがくに瞳を見開き甲高い声かんだかを上げる。ブリーフィングを終え艦長室に戻った彼女を待ち受けていたのは想像だにしない人物、マキムラ伍長であった。

書類の積まれたアンティーク机の前に立ち、不気味な笑みを浮かべている。その顔は異様な自信に満ち溢れ、とてもエリーカに悶絶させられていた男と同一人物には見えなかった。

「くく、お待ちしていましたよ。艦長」

「一体どうやって扉のロックを解除したの？」

艦長室は分厚い壁と扉によって守られ、ロックを解除する番号はクラウドディアしか知らない。本来なら他の乗組員はおろか、エリیکاですら立ち入ることはできないのだ。

マキムラが凄腕のハッカーか超常的な能力でも有していなければ、この状況に説明がつかない。

「説明なんて後でいいでしょう。それより艦長に重要な話があるんですよ」

「話ですって？」

「まあ、聞いてください。実は今、この艦にはグリードが潜伏しているんです」

「……………ッ!!」

クラウドディアの時間が凍りつき、解凍と同時に一度目よりも高い声が上がった。グリードの侵入を許すなどあつてはならない最悪の事態だ。

「マキムラ伍長、今の話は事実なの？ もしそうなら急いで非常事態警報を出さないといけないわ。まず、どのブロックにいるか教えてもらえるかしら」

クラウドディアは嫌な感覚を覚えながらも、動揺する心を鎮め問いかける。

マキムラが立ちふさがっていないければ、すぐにでも机の上に置かれた通信機に手を伸ばしているところだ。

「……………」

「どうしたの？ 黙ってないで早く言ってちょうだい」

マキムラは口角を吊り上げ紫色の舌で唇を舐めた。まるで手品の種明かしをする子供のよう。

「……教える必要なんてありませんよ。だって、ここにいるんだからなァ！」

「ま、マキムラ伍長!!」

痩せこけた身体が赤熱し蒸気が噴き出す。口が耳まで裂け、左半身がイナゴのような外骨格に変貌する。エメラルド色に輝く腕にはかぎ爪が出現し、わき腹ではタコの足に似た触手がくねる。

右半身こそ人間の形を保っているものの、にじみ出る暴力性はグリードそのものだ。

「グリード……ッ!？」

腰のホルダーからレーザー銃を抜き構えるよりも、マキムラの動きは俊敏だった。触手が銃身に絡みつき鉛筆のようにへし折る。

「あつぶねえな。僕を殺すつもりですか」

「……あなたはだれ？ 本当にマキムラ伍長なの？」

「そういえば説明がまだでしたね。余計なことはするんじゃないぞ」

マキムラは何食わぬ顔で言う。口調の乱れや身体の変化など気にも留めていない。

「艦長たちが行った後、グリードの幼体と遭遇したんですよ。リンクシステムで迎撃される前に隙間に潜れるオレだけが侵入できたってわけだ。んで、ここを乗っ取ろうとエンジンや通信設備に取り付いたが上手くいかねえ。どうもメインコードってやつが必要みたいだからな」

「その力でこのロックも解除したわけね」

「だからオレはコイツと融合してコードを探すことにしたわけだ。グリードの膂力りよりよくやハッキング能力は僕にとっても魅力的でしたからね。喜んで提案に乗らせてもらいましたよ」
(研究班が聞いたら腰を抜かすわね)

クラウドは信じられないという顔で目の前の化け物を見た。グリードの言語や能力、知能レベルまだ研究途中だ。人類の言葉を理解し艦の機能を把握しようとするなんて、驚愕としか言いようがない。

ましてや人間とグリードの融合など前代未聞だ。

「よくわかったわ。それで、あなたは人とグリード、どちらなの？」

少しでも時間を稼ごうとクラウドは話を引き延ばす。どうにかして隙をつくり、エリーカや乗組員たちにこの事態を知らせなければ。

「は？ 人間に決まってるだろ。まだ意識が混線していますが基本的な人格は僕のままです」

す。もつとも、趣味嗜好はグリードの影響を受けていますけどね」

「人間ならどうして人類を裏切るようなことをするの。『地球圏の平和のために力を尽くす』そう思ったからあなたも軍人になったのでしょう？」

「そんなものをつくの昔に忘れたっつーの。大体僕のことを虐げる世界に意味なんてありませんか？ ゴミのように扱われるくらいならグリードに協力したほうがマシですよ。この力があればできないことなんてねえしなあ。人類を滅ぼし星を食い尽くしたくてウズウズしていますよ」

マキムラが口を開くとノコギリのような歯が剥き出しになった。唾液と共に醜い欲望がこぼれ落ちる。

「落ち着いて聞いてちょうだい。グリードの意識が混じったことで思考や感情が変質しているのよ。大丈夫、今ならまだ治療できるわ」

「あ、あ、オレ僕……僕僕僕です。ふう、少し調子が戻ってきましたね。では艦長、治療の前にこれを見てもらいましょうか」

マキムラは通信端末をクラウディアに向ける。

「そ、そんな……嘘でしょう!!」

画面にはアルTAILのメインエンジンが映っていた。赤黒い臓器のような物体、グリー

ドの用いる生体爆弾を取り付けられた状態で。

「なんてことをするの！ 起爆したらあなたまで死んでしまうのよ!!」

「艦の全員を道連れにしてね。爆弾は僕の命令か心臓の停止、どちらでも起動します。宇宙の藻屑になりたくないなら勝手な行動は慎むように。たとえば他の乗組員に連絡を取るとかね」

「あなたの目的はなに？ わたしの艦をどうするつもりなの？」

事態打開の糸口を見つけようと懸命に質問を続ける女性艦長。一方、マキムラはおどけたように肩をすくめ、余裕を持って口を開いた。

「さつきも言ったでしょう、メインコードですよ。これさえあれば艦の全システムを掌握することも容易たやすいですからね」

クラウディアの美貌が緊張で強張る。このために自分が一人になる瞬間を狙い、艦長室で待ち伏せていたのだ。

だが、メインコードはアルタイルの核となる部分。侵略者に教えるなど絶対にあり得ない。

「リンクシステムをグリードの母星に持ち帰れば僕たちの勝利も約束されたようなもの。手荒な真似はしたくないですし、素直に吐いてもらえると助かるのですが」

「悪いけどそれはできないわ。人類連合の一軍人としてグリードに屈するわけにはいかないの。ハラオ・マキムラ伍長、お願いだから正気に戻って」

「やれやれ、仕方ありませんねえ。それでは直接身体に聞くとしましうか」

不気味に笑いながらマキムラが近づいてくる。わき腹の触手が伸長するとクラウディアを^{から}搦め捕り、軍服の胸元を切り裂いた。

「き、キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!？」

「いい下着ですね。似合っていますよ」

「っ……!」

レースで彩られた純白のブラジャーが姿を現す。たわわに実った肉メロンを隠すためなのか、カップサイズはデタラメに大きかった。

「すごい迫力だ。よくここまで育ったものですね」

「や、やめなさい! これは命令よ!」

「この大きさと百センチを超えているはず。まるでメロンのようだ」

「いやっ、見ないで……っ!」

同年代の友達よりもかなり胸が大きいことに気づいたのは士官学校の頃。男性から好奇の視線で見られる上に、訓練の妨げになる巨乳房は一番のコンプレックスだ。

「チラチラと視姦されていたことは気づいていますよね？ このデカチチを前からずっと好きにしたいと思っただけですよ」

「お願いだからひどいことを言わないで……」

自分が性欲の対象として見られている事実にはゾッとする。一〇八センチ、Jカップの巨爆乳を揺らしてプロンドの女性艦長は必死の抵抗を試みた。

「そんなことしても無駄ですよ。グリードの力から逃れられるわけがないだろう。くく、それとも誘っているんですか？」

「今ならまだ取り返しが……んっ、うううう！ くうううううううううう!!」

肉球に触手が巻き付きいやらしく揉みしだく。指先でマシユマロを弄ぶように。

フニユ♥ ムニユ♥ ムニユフニユン♥ ムニ♥ ムニムニムニ♥

「やめっ、あうううう……や、やめなさい！ 触ってはダメ！」

「素晴らしい手触りですよ艦長」

「ひう、くううう……はあ、ああああああ……」

粘液でヌルついた吸盤がブラジャーの上からおっぱいを愛撫する。白い膨らみが官能的に形を歪ませる。

「暴れないでください。すぐに感じさせてあげますから」

「ああ、つ、うううううう……こんな痛いだけよ……あウくウウウウう！」

「その痛みさえも快楽に変わるということです」

「ふう、う、うううううううううううう！ こ、こんなの間違っているわ！ ン、くう……はうううううううううう……」

吸盤がペタペタと巨爆乳を撫でまわす。上下左右全方向から柔肌を揉みしだかれる屈辱。愛の欠片もない乱暴な愛撫に鈍い痛みが走る。

「メインコードを渡してくれるのならここでやめても構いませんよ。今ならまだ取り返しがつきますしねえ」

「たとえわたしを殺したとしてもコードは渡さないわ……あぐ、ク、んぐううううううううううう！」

「そりますよその表情。 𦉳^{なぶ}り甲斐^{がい}がある」

「ううっ……ンンンンッ！ ああ……ううう……ひくうううううう……！」

口から甘い声が漏れ出し、黄金のウェーブロングヘアを振り乱す女性艦長。身体の内側が熱くなりチリチリと炙^{あぶ}られていくような感覚が沸き上がってくる。

（どうして反応してしまうの……相手は半分グリードなのに）

せつなく女の部分が疼きクラウディアは戸惑う。エイリアンの愛撫などおぞましきしか

ないはずなのに。

「あひっ?! く、くウウウウウウウ……! はあ……はあ……はあ……はあ……」

「どれだけ揉んでも飽きませんね。素晴らしいおっぱいだ」

「もう揉まないで……クウ、ンううううう……はあああああああ!」

白く透き通った肌が赤みを増していく。大きな胸乳がプリンのように震える。

(下着越しに胸を触られただけで身体が火照ほつちやう……いえ、しつかりするのよクラウ

ディア! 流されてはダメ!)

死と隣り合わせの日常を送ってきたせいなのか、グリードによる愛撫ですら胸が高鳴る。昂たかぶった身体を指で慰めてきた日々。

それとは別種の淫悦が心を溶かしていく。

「そろそろこちらも頂かせてもらいましょうか」

「ヒウツ!! そ、そこは……!」

胸を揉んでいた触手はニップルにターゲットを変更する。ブラジャーが引き千切られ乳首が露出する。

「いや、見ないで! 見てはダメえっ!」

「アハハハ、なんですかこれは!」

「くうううううう……い、今すぐやめて！ ひうううう……うううう……あヒイイイイイイッ！」

「感じたりはしないのでしょうか？ 肩の力を抜いてリラックスしてください」

「アグ、グ、グムううううううううう……ッ！ ダメッ、出る……！ 出てきちゃうううううううううううううう！」

極細触手が目標をつまむとひと際大きな嬌声きょうせいが吐き出され、クラウディアの背筋が弓なりにのけ反った。ピンセットでつまむように、巨大な白丘の中心から隠れていた雌粒が引きずり出される。

「ああああ……！ はあ……はあ……こんなことって……」

全身に汗の玉を浮かばせ荒い息を吐く。視線の先には熟れたイチゴのような乳頭があった。粘液でベトベトになったそれは、微かに震え淫臭のこもった湯気を立てている。

「くく、いやらしい乳首ですね」

「人の身体をなんだと思つて……んっ、うううう……ひどいわ……！」

「感じながら言われても説得力がないですね。もう勃起ぼっきしているじゃないですか」

「別に感じてなんか……ぐうっ、あぐうううううううううう!!」

赤く充血した突端に触手が巻き付きクリクリと扱く。神経を直接やすり掛けされるよう



「お次はこちらの相手をしてもらいましょうか」

「ひ……ヒイツ!？」

マキムラはズボンのジッパーを下ろし、赤黒く勃起した陰茎を露出させた。

太く長い毒キノコのようにそそり立つそれはプンプンと恥垢の匂いを漂わせ、吐き気を催さずにはいられない凶悪さを主張していた。

クラウディアは触手に引かれ床に尻餅をつき、股間の前に顔を近寄せられてしまう。

「不潔なもの近づけないで！ ゆ、許さないわよ！」

「別に構いませんよ。どのみち査問委員会に突き出されるところだったわけですし」

「くっ……あ、アアアア……!？」

「艦長、僕がなにをしてほしいのかわかりますよね？」

へビのように女体を嫖るマキムラ。上官を服従させる快感に愉悦の笑みが止まらない。

（あれをするのよね？ わたしの口で……）

知識として知っていても身体が行為を拒絶する。変態男、それも半グリードの性器に奉仕するなど想像するのもおぞましい。

「この程度のことでもできないなんて失望しましたよ。それとも女性乗組員たちと一緒に犯されるほうが好みですか？」

「や、やるわよ！ やればいいんでしょこの変態！」

半ばやぶれかぶれになりながらも、クラウディアは肉竿に顔を寄せる。濃密な雄の香りに頭がクラクラしそうだ。

（うう、臭い。これを口に入れるなんて……で、でもやらないと！）

エリーカや他の乗組員を守るため、恥辱に耐え唇を亀頭に近づける。そしてゴクリと唾を飲み込むと、意を決して口内に招き入れた。

「んぐ、ん……んんん……」

生臭い匂いが鼻腔を満たし、喉の奥からすっぱいものがこみ上げてくる。可能ならばすぐに吐き出し口をゆすぎたい。

「まさか口に含むだけで済むと思っていませんよね？ しっかり舐めてください」

「え、ふええ。わかつていりゅわ……ちゅう、んっ、じゅりゅうう……」

たどたどしい舌使いで肉竿をしゃぶる。激しい怒りと屈辱に胸が張り裂けそうだ。

「ちゅぶ、ん、ちゅ、ちゅじゅくううう……んぶ、ちゅうくうう……」

「その調子です。しっかりとチンポに奉仕してください」

「いちいち言わひゃいで……はぶ、じゅうう……ちゅ、ちゅはああ……」

肉竿に舌を絡め丹念に舐め回すクラウディア。恋人にもしたことがないねっとりしたフ

エラチオでペニスを悦ばせる。

「うぶ、んぶうううう……ぞじゅ、ちゅくはうううううう……!」

「イマイチやる気が感じられませんか。もつとしつかり心を込めてしゃぶってくださいよ」

「ちゅじゅ……んんう、やつてりゅでひよ……!! んぶ、んぶうううううう……つ!」

「口答えしない。この力の前ではあなたなんてただの雌にすぎないんですよ」

「づ、はあむ、じゅぶ……ちゅうううう……!?! じゅぶ、じゅぶ、じゅぶうううううう! んぶ、ううううう……!!」

優越感を漲みなぎらせマキムラはさらに腰を突き出した。喉の奥を亀頭に叩かれクラウディアは機嫌を損ねないように、より激しく肉竿に奉仕する。

「はう、うううう、じゅりゅりゅりゅうううう! ずぞ、ぞぞぞ、んぐうウウウウウウウウウウツ!」

口内の温かさと唾液のヌルつきが鈴口をヒクつかせる。

まるでライチをしゃぶるように亀頭を愛撫する。舌を動かすスピードが上がり、甘い官能が喉の奥から湧き上がってくる。

「ちゅぶ、むちゅううう、はあ……あはあああああ! ちゅううううん! ひどい匂い……んちゅ、じゅりゅ、じゅぶぶううう……ンク、んハアア……」

「調子が出てきたじゃないですか。さすが艦長飲み込みが早い」

「黙りなふあい……んづ、ちゅうく、ちゅぼ、ちゅば、ちゅくりゅうううううう……っ！
んむ、ふああああ……っ！」

たどたどしくも情熱的なフェラチオに怒張器官がヒクつく。クラウディアの心臓はドラムのように鼓動を速め、淫悦を高めるBGMと化していた。

口の中は唾液とカウパーが混じり合いグチョコグチョコだ。

「んじゆる、んじゆくううううう。ふうむ、はあむ、んずぐううううううっ！ は、早くイッてちようふあい……ああ、んぶ、はうああああ……」

「くく、なんて間抜け面だ。その顔最高ですよ」

「んぶ、んぶ、ちゅぐ、ずじゅじゅじゅうううう……っ！ ずぞ、そじゅぐううううううう……っ！」

口をすぼめ喉の奥まで勃起肉棒を招き入れる。舌の付け根をカリ首が擦り、紅い洞窟を膨張した海綿体が埋め尽くした。

戦場で指揮を執る姿からは想像もできない痴態。クラウディアは鼻の下を伸ばした下品な馬面で口淫奉仕を続ける。

「んぐ、また大きくなって……匂ひもキツい。あうむ、んじゅふうううう……息がくる

ひい……ちゆく、んくう、ぞりゆう、ちゅはああああ……」

「嬉しいことを言ってくれますね。チンポも喜んでいきますよ」

「んうっ、ちゅぶくうううううううっ！　じゅぶ、んぶ、じゅりゆううううううう！」

巨爆乳を手で支えながらチンポにむしゃぶりつく美人艦長。恥垢とカウパーの混じった汚汁を飲み込み、必死になって下衆男に媚びる。

「おっと、これ以上は我慢できませんね。出しますよ、艦長」

「んぐっ!?　ふぶぶううう……んぐうううううう……ッ！」

尿道口がせわしなく開閉を繰り返し、肉幹が精を吐き出そうと荒ぶる。雄の匂いがさらに濃さを増し、ひよっここフェラを続けるクラウディアの口内に濃厚なザーメンが吐き出された。

ドビュ、ビュクク、ドビュククウウウウウウ……ッ！　どく、どくくん！

「ン、んん、んぐくぐううううううううううう！　うぶ、ごぶ、くぶぶぶうううううう……ッ！」

腐ったミルクのような白濁液が舌の上を滑り味蕾みらいを蹂躪する。気を抜けば一瞬にして意識を失ってしまいそうな汚汁だくりゆうの濁流だ。

「おぶ、うぶぶ、うううう……」

「残さず飲み干してくださいね。吐き出したらお仕置きですよ」

「ごく、ごく……んぶ、ゴク、ゴクン……」

一滴もこぼさぬように喉を鳴らして嚥下する。鼻の穴からも溢れたザーメンが垂れ流され、あまりの惨めさと情けなさに涙が出そうだ。

「ング……ッ……全部飲んだわよ。こ、これでいいのよね？」

「ええ、そうです。これで準備が完了しました」

「準備？ ズ……ンンッ!? な、なにこれ……あぐ、んううううううううっ!?」

フライパンを火にかけるように、クラウディアの身体が熱を帯びていく。血管一本一本の脈動が鮮明に感じられ感覚が鋭敏になっていく様が実感できる。

身動きをするだけでも肌が紅潮し、まるで全身が性器になった気分だ。

「っ……わたしになにをしたの？」

「精液と一緒に媚薬を注入しただけですよ。グリード特製の媚薬をね」

「び、媚薬ですって!？」

「粘液にも混ぜていたんですが気づきませんでしたか？ くく、すぐに肉体のあらゆる部分がクリトリスのように敏感になりますよ」

「冗談はやめて！ そんなことあるわけ……あ、ぐ、ぐううううう！ ふぐ、ンッグウ

触手がクラウディアの身体を持ち上げると両腕を縛り上げ、足をM字に開脚させる。タ
イトスカートがめくれ白レースのショーツが露わになった。

「ぐ……んん、う……」

「さて、拝見させてもらいましょうか。天才女性艦長、クラウディア・バルシュミーデの
おまんこをね」

「いや……やめて！、やつ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

無駄だとわかっていてもかぶりを振らずにはいられない。ショーツが触手によってズラ
されると、乙女の秘奥がマキムラの前に姿を現した。

「使いこんでいるのかと思いましたが存外綺麗ですね。まるで生娘のようですよ」

「……もうしゃべらないで」

クラウディアは奥歯を噛みしめ恥辱に耐える。股間部にはブロンドの陰毛が芝生のように
整って生えていた。

開帳された肉溝は薄ピンク色でツヤツヤと光る花卉が複雑に重なっている。

（こんな男にアソコを見せるなんて……最悪だわ）

人間としても最低の男に女の部分を見られ、目じりに涙を浮かばせる。男性経験がほと
んどないクラウディアにとって、性器を無防備に晒すなど想像だにしない変態行為だ。

(ううっ……身体の熱が治まらない。こんなに恥ずかしいのに身体が疼いちやう……ああ、
ンくウウウウウウ……)

爆乳愛撫とフェラチオで昂った蜜壺は舐める必要もないほどぐっしりと濡れていた。陰唇はテカテカと光り発情した匂いがブンブンと香ってくる。楕円形のワレメは小宇宙を想起させ、雄の欲情を誘わずにはられない。

「心の準備はよろしいですか？」

「いやだと言ったらやめてくれるのかしら」

「いいえ。楽しませてくださいいね艦長」

マキムラは勃起したペニスを淫裂にあてがう。乙女の白雪のような肌が緊張で震える。そして欲望の赴くままに腰が突き出された。

「っ……く、くうううう……!!」

くぐもった水音を立て怒張した肉幹が侵入してくる。ミチミチとワレメが開き奥へ奥へと雌肉がかき分けられていった。

ズグ、ズググ、グググ! ズチュ、ズグチュウウウウウウッ!

「ああっ! くんううう……あくうう、ヒウ、ひくううううっ! アグ、アあああ
あああああああああああああああッ!!」

巨大ペニスで穿^うたれる衝撃に耳をつんざくような悲鳴が上がる。背筋が弓なりにのけ反り、メロン巨乳がブルンッブルンッと激しく弾んだ。

普通の成人男性ではあり得ない圧迫感に呼吸が止まりそうだ。

「アア、イイ……素晴らしい具合だ」

「グ……んんっ、熱くて太いのが入ってきて……あつ！ アアッ！ あんウウウウウウウウウ……！」

臆をみつちりと満たされクラウディアの思考が蕩けていく。感度を上昇させられた影響かまだ動いてもいないのに果ててしまいそうだ。

肉体が快楽を求めて制御することができない。

（エリーカがここにいなくてよかったわ……あんなセリフ絶対に聞かせられないわね）

情けないセリフと嬌声が副官の信頼を裏切るようで心が痛む。波濤のように襲い来る絶頂感の中で、クラウディアはおぼろげに考えた。

「緊張する必要はありません。艦長が関係を持ったどの男よりも気持ち良くしてあげます

よ」

「はあ……はあ……う、あぐああああ……」

恐るべき快楽刺激を前にクラウディアは焦燥の汗をかいて身をよじる。全身の細胞がざ

(ダメなはずなのに気持ち良くてたまらない。セックスでここまで感じるなんて……)

自慰や恋人との性行では得られなかった淫悦にクラウディアは戸惑う。媚薬が原因だとわかっていても、膣肉が陰茎を締めつつさらなる快楽を求めようと発情してしまう。

「熱くて激しい……あああつ、アアアアアアアッ！ いやらしい音が止まらない……くう、くううううう……」

「そろそろ効いてくる頃合いですね。艦長、なにか感じませんか？」

「んっ……そういえば胸が張ってきて……はあ、あああ……」

「僕の媚薬には副作用として母乳を出す効果があるんですよ。まるで乳牛ちちうしのようにね」

「ぐづ、んづウウウウウウウウウッ！ ふざけたことを言わないで……だれが母乳なんて……っ、いうううううううう！」

妊娠もしていないのに射乳するなど想像もできない恥辱行為だ。人の身体をジョークグッズとでも思っているのだろうか。

だがそのことに考えを巡らせる前に、パチュンパチュンと肉のぶつかる音が響き、クラウディアの理性が溶解していく。ピストンされるたびに思考が抵抗力を弱めていく。

「イク時にはぜひ盛大に嘔き出してもらいたいものです。リンクシステム適合者の射乳アクメを」

「わたしはあなたの思い通りになんてならないわ。絶対に耐えてみせます……っ！ アグ、あああ、んううううううううう！」

唇を噛み胸の疼きに耐える。戦艦アルタイルの艦長として、これ以上恥ずかしい姿を晒すわけにはいかない。

「その余裕がどこまで続くか見ものですね」

「くうっ!? ち、乳首キツいい……あう、ひゃあああああああ！」

「露出乳首が弱点ということはもうバレているんですよ。陥没していたせいで触ったことすらないのでしょうか？」

「この変態……あく、んぐくウウウウウウウウウッ！」

目いっぱい怒りを込めて吐き捨てる。だが、M字開脚の体勢ではまったく威厳など存在せず、むしろ陵辱者を悦ばせるだけだ。

膣奥を穿つピストンも速度を増し、さらなる快樂地獄へ足を踏み入れていく。

「くく、さつさとあきらめたほうが楽になりますよ」

「あくううううっ！ 乳首コリコリしないでえ……あう、くうううう、ひゃううううううううううううううっ！」

煌めく美貌を真っ赤にして乳首責めに耐える女性艦長。極細の触手が赤く充血したニッ

「なっ、中だけはやめて！ ほ、本当にそれだけはダメなの！」

悲鳴を上げるようにクラウディアは懇願する。愛しているわけでもない男の精子などおぞましきかない汚汁。

おまけに今の相手は半グリードの怪物なのだ。とても許可などできるわけがない。

「却下します。まあ人間とグリードで生殖活動が可能か知りませんし、着床しないことを祈っておくんですね」

「いや……やめて……やめてエエエエエエエエエエエエエエエエッ！ ぐん♥ んくうううううううううう♥」

中出しへの恐れが快楽で塗りつぶされていく。マキムラの肉竿がさらに膨れ上がり、抜き差しするたびにえも言われぬ悦楽が子宮を震わせる。

嬌声が甘い音色を帯び意識が遠のいていく。

「アアアッ！ わたし……わたしは……う、んきゆくうううううううううう♥ おっぱいすごい♥ アソコも気持ち良すぎてえ♥ ああつ、いウウウウウつ♥ ハウウウウウウウウウウウウウウウ♥」

クラウディアは妖艶な色香を振りまき熟れた肢体をくねらせた。メロン巨爆乳はタップンタップンと激しく揺れ、露出陥没乳首が触手愛撫に追い立てられる。

わかっていますよね？」

「はう♥ うううう……」

肉竿をずぷりと引き抜き、倒れ伏す上官を眺めながらマキムラが嗤う。媚薬による肉體改造、グリードの精力を用いた大量射精に母乳噴出。

普通の女性なら自死を選びかねない最悪の恥辱だ。

「……ない……」

「ん？ 今なんと？」

「……思い通りになんてさせないわ。メインコードなしで艦の針路を変更するなんてまず不可能。あなたを待っているのは地球での破滅だけだわ！」

クラウディアは顔を上げ正面から敵を見据え宣言する。サファイアブルーの瞳には人類連合の一員、人としての矜持きよじしが燃えていた。

媚薬の快感を精神力で抑え込み、微かな希望を胸にクラウディアは改造拷問へ挑む。

「残念ですが尋問を続けるしかないようですね。艦長の身体をもつといやらしく改造してあげましょう。それと……くく、中佐に訊いてみるのも面白そうだ」

「——ッ!？」

決意に燃える瞳が一瞬にして恐怖に染まる。メインコードを知っているもう一人の人物、

自身の副官が汚されようとしている現実には美貌が青ざめる。

「エリーカに手を出さないで！ 彼女を傷つけたら絶対に許さないわよ！」

「それは怖いですね。まあ、見ていてくださいよ艦長」

「させない……っ、あうくううう……！」

陵辱のダメージで立ち上がることもできず前のめりに倒れる。淫裂からはドロリと白濁液が垂れ落ち、乳房も射乳快楽に震えたままだ。

「止まりなさい……っ！ 命令よマキムラ伍長！」

人間の姿に戻り欲望の笑みを浮かべるマキムラをクラウドはただ見送ることしかできなかつた。

バチイ！ バチイ！ バチイ！ バチイイイイイイ！

「クウウウウウウ……み、身動きできない相手に暴力を振るうとは……どこまで性根が腐っているんだ！」

『戦場ではルール無用でしょう？ 甘いことを言わないでもらいたいですね』

「くそお……アグ、あぎイイイイイイイイイイイッ！ ぐう、ンウウウウウウウウウウウウウウウッ！」

尻タブを叩かれるたびに針で刺されたような悲鳴が上がる。エリーカはマキムラの手の動きに合わせて、まるでラジコンのように喘いでしまっていた。

マゾヒズムを強制的に引きずり出され、形のよい胸が官能的に弾む。

「あグ、ふぐうううう……ひツクうううううううう……♡」

『おっと、締めまりがキツくなってきましたよ。まさか叩かれて感じているわけじゃないですよね？』

「っ……そんなわけがあるか！ だれが貴様の生温いビンタなどで……ッ、クウウウウウッ！ ひイ、いヴうううううううううううううう♡」

虚勢を張ろうにも響く嬌声と淫裂のわななきが感じていることを示してしまふ。

ギユウギユウと肉壺に締め付けられた肉竿はさらに怒張し、棍棒のような亀頭が子宮口

を叩いた。涼やかな美貌は汗とよだれで醜く汚れていく。

『身体は正直なようですね。どうやら中佐にはマゾの素質があるようだ』

「うるさいうるさいうるさい！ その口を閉じろ……ッグ！ ヒイ、グウウウウウウウ

ウウウウウーッ♥

ちようちやくおん

打擲音が鳴るたびに意識がホワイトアウトのごとく真っ白になる。被虐快感に肉壺が吸

着を開始し、気持ち良さが止まらない。

理性の枷かせがクッキーのように砕け落ちていく。

「ぐうううう……尻がビリビリくるううう……チンポで感じるう♥ うう……チンポ♥

チンポ♥ チンポいい……♥

『ずいぶんとはしたくないセリフですね。どうしたんですか？』

「あひううう……き、貴様のせいだろう！ 恥ずかしい言葉が我慢できない……ま、マ

ンコ気持ちいい♥ 叩かれて感じてしまう♥ 私のマンコでチンポハグしてしまううう

うううう♥ んうううううううううう♥

インストールされた淫語の情報がエリーカの心身を狂わせる。いけないとわかっていて

も痴女のようなセリフを吐かずにいられない。

自分を貶めることでさらなる快楽を貪ろうとしてしまう。

(い、イキたくてたまらない♥ コイツのチンポが強すぎる♥ こんなデカマラで突かれ
たらだれだって敗北アクメしたくなるに決まっている♥ あ、あううう……♥)

ピンク色の靄がエリーカの思考にかかる。暴力的なピストンとスパンキングにマゾとし
て調教されていく。もう絶頂することしか考えられない。

「も、もつと痛くしてくれ♥ 痛みで私を感じさせてくれ♥ ハゲ、くうううう……ん
ひううううううう♥ い、イキたい♥ マンコイキたいいいいい♥」

『絶頂したいならマゾだと認めてもらいますよ。』
「私はお尻を叩かれて感じる変態マ
ゾです」とね。大きな声で言ってもらいますよ』

「わかった認める♥ 認めるからもつと激しく突いてくれ♥ 私の奥をノックしてほしい
んだ♥ あん♥ あああ♥ ひゃああああ〜ん♥」

媚びるように屈服の言葉を吐き、だらしなく舌を突き出す。

絶頂が近いことを悟り膣孔の締め付けはどんどん強くなる。淫猥に喘ぐエリーカに合わ
せて、マキムラはピストンのスピードを速めていった。

パチュンパチュンと腰を打ち付ける音が大きくなり、被虐の悦びにしなやかな肢体が痙
攣する。

「く、くる……きてる♥ 私のマンコがヘンになってしまう♥ づっ、ふんぐうううう



ううううっ♥ あっ、あっ、あああっ♥」

『いきますよ。しっかりと受け止めてくださいね中佐』

「あ、あぐうううう…アヒイイイイイイイイ〜ン♥ チンポ♥ チンポチンポ♥ チンポほしい♥ ザーメンほしい♥ ほお、おとおお…♥ は、恥ずかしいマゾアクメさせてほしいiiiiiiii」

エリーカの嬌声がはね上がり卑猥なセリフを連呼する。膣肉の締め付けがさらにキツくなり、雄汁を一滴も逃すまいと肉ヒダが密着する。

それと同時に臨界点を迎えた肉竿はブルブルと蠢き、濁流のような勢いで精液を吐き出した。意識が七色に煌めき飛翔する。

ビュク、ブビュルル！ ドビュ、ドビュビュビュ！ ビュババババ〜〜〜ツ！

「マゾ♥ マゾマゾ♥ マゾマンコイツてるうううう〜♥ わ、私はお尻を叩かれて感じてしまう変態マゾなんだ♥ いたずらをした子供みたいにお尻ペンペンされて発情するみつともない雌豚♥ 男の汚いチンポ汁注がれて子宮悦んでしまう壁尻マゾなんだああああああああ♥ ほお♥ おお♥ おッホおとおおおとおおおおお〜♥」

尻肉を何度も痙攣させながらエリーカは絶頂する。中出しされる感触がよほど心地よい

のか、膣穴が魚のように何度も口を開いた。

マゾだと絶叫することがたまらなく気持ちいい。

『ふう、いいおまんこでしたよ』

「チンポしゅごい……しゅごい……♥ アへ、へえ、へえええ……♥」

射精の後マキムラがチンポを引き抜いても、ビクビクと背筋の震えは止まらない。開ききったマンコからは白濁液がドロリと垂れ落ちた。

だらしなくアへ顔を晒す白目には最早何も映ってはいない。

（ハア……ハアア♥ ンっ、待てこれは……）

絶頂の余韻に浸るエリーカは下腹部に違和感を覚えた。膀胱からそろりそろりと昇ってくるこの感覚は——

（尿意!! ま、まさかここで!!）

ピストンも終わり緊張が解けたのか激しい尿意を覚える。今すぐにトイレに行かなければ漏らしてしまいそうなのだが、身体はガッチリと壁に埋まっている。

（嫌だ嫌だ嫌だっ！ こんなところで漏らせるか！ 男どもが見ているんだぞ！）

一瞬で意識を覚醒させ壁からの脱出を試みる。だが、そんなことはもちろん不可能。

「マキムラここから出せ！ も、漏れてしまうんだ！ つ……ああ、やだ……我慢しろ……」

…！ ううう、ムううう…！！

必死になって呼びかけるが陵辱者からの返事はない。非情な現実が迫ってくる。

「お願いだからトイレに行かせてくれ！ 私にできることならなんでもするから！」

半狂乱になってみともなく手足をバタつかせる。絶頂の余韻などどこかに吹き飛んでしまっていた。

「いやだ…いやだあ！ ア、あああ…！！」

エリーカはかすれた声を出し美しい容貌を青ざめさせる。それに合わせるように膀胱の耐久力が底をつき、膣穴の上にある尿道口がヒクついた。

黄色色の液体が勢いよく放出される。

ジョバ、ジョボボ♥ チョロロ♥ ジョボボボ♥ ジョロロオオオオオオ〜ツ♥

『うわ、コイツ漏らしやがったぞ！』

『きったねえ！ 足にかかっちゃまっただろうが！』

『くっさ！ 中佐のションベンマジで臭いんだけど』

乗組員たちは驚いてその場から飛び退いた。軽蔑の言葉と視線がエリーカに突き刺さる。

『あーもう臭すぎ。マキムラさんこのオナホちよつと高性能すぎない？』

『どうやら放尿のスイッチを押してしまったようです。申し訳ない』

「うあ……あああ、あああああああああああああああつ！」

マキムラにまでフォローされ流麗な双眸から涙がこぼれる。幼児でもないのに人前で放尿してしまった。惨めで情けなくて死んでしまいたくなる。

『ちゃんと謝ってくださいね中佐。おしっこを漏らしてごめんなさいと』

「お……おひっこを……うう……」

『もつとはつきりと』

グチャグチャになった頭の中にマキムラの言葉が楔くわくとなつて打ち込まれる。あれだけの痴態を晒した後で抵抗する気力などあるはずがない。

銀髪女性士官は涙声で恥辱のセリフを言ってしまう。

「漏らしてしまって申し訳ありません！ エリーカ・ラーゲルフエルト中佐はいい歳してみつともなくおしっこを漏らしてしまつたんだ！ 臭くて汚いおしっこをジョロジョロ垂れ流す変態！ 恥ずかしいマゾお漏らし女で本当に申し訳なく思っている！ うう……ひどい……ひどすぎる……」

軍人としての矜持を捨て去り失禁を謝罪する。涙と鼻水まみれになつた顔に上官としての凜りり々しさなどまつたく見えなかつた。

「やめっ……あう♥ ふおおおおおおおおおおおっ！」

クラウディアの膣穴には新しく、エリーカの肛門には今までと変わらず、分離した触手が植え付けられていた。

媚薬改造で発情した雌肉を内部からかき回される感触、氣力を振り絞らなければ立っていることすらできない。

「んう、はぐうううう……クラウディア様、平気ですか？」

「大丈夫よ。男のアレまで生やされたんだものこれくらいなんとも……ッ、はあぐううううううう……！」

自身も肛門粘膜を擦られながら上官を氣遣う。快美の波動は腰を回す動きに合わせて大きくなり、雄と雌どちらの性器でも絶頂してしまいうさだ。

「艦長、中佐、みんなお二人のダンスを楽しみに集まったんですよ？ もっとエロチックに自分の魅力をアピールしてください」

「……わかったわ」

「チッ、言われなくても理解している」

眉間に皺を寄せながらもマキムラに従う。乗組員の大半が敵に回った現状は限りなく最悪。孤立無援の状態で耐え抜くしかないのだ。

「い、いくわよ」

つかえながらクラウディアが口を開く。脈拍が上昇し吐く息が熱を帯びていった。

「きやるくん☆ 変態マゾアイドルのクラウディアです！ 今日わたしは無駄に大きなおっぱいやデカ尻を揺らして踊るから、いっっぱい楽しんでいってね♥」

ニッコリと笑い両手で胸を持ち上げ男たちに媚を売る。豊満なボディをオナニーのネタにしてほしいというように。

柔らかな笑顔は死にたいほどの羞恥に引きつっていた。

「あんっ、あああん……はああくん♥ お、おっぱいすごいでしょ♥ サイズの二回り大きな衣装じゃないと前が留まらないの♥ んう、ふううううう……♥」

「それだけじゃわかんねえな。カップはいくつなんだよ！」

「んう、んくうううう……じゃえ、Jカップよ♥ 牛みたいに垂れてて恥ずかしいJカップ♥ あう、ふうううう……おチンチンくらい簡単に飲み込んだじゃうわ♥」

前かがみになり両腕で胸を挟んでアピールする。コンプレックスだった巨爆乳をたゆんつたゆんつと揺らし、衣装の隙間からは乳輪がチラ見えた。

むしゃぶりつきたくなる巨尻を振ることも忘れず、乗組員に野次を飛ばされるだけでマゾ肉体が発情して仕方がない。

「んう、うううう……ふううううう……ん♥ あうう……乳首弄っちゃおうかしら♥ ふう、んくううううあ……ハウウウウウ……ン♥」

胸乳の先端、乳首に当たたる部分をつまんでコリコリと扱く。陥没していた乳頭は度重なる調教によって簡単に屹立するようになっていた。

「マキムラさんに改造されてクリチンポみたいに感じちゃうエロ乳首♥ はくうううう……あなたたちにもあとで触らせてあげるわね♥」

「もったいぶってんじゃねえよ。今すぐ揉んでチンポぶち込ませろ」

「お、ふおおおおおおおおおおおおおお……♥ ごめんなさい、ステージが終わるまでお触りは禁止なの♥ ジジ、ぐふウウウウウ……ッ♥」

洗脳された乗組員に言葉を返され、軽く愛撫しているだけに生挿入されているほどの快美が走る。コスプレ衣装が安物なのか、薄い布地を突き上げるマゾ乳首は、強烈な存在感を主張していた。

「なら、チンポの代わりにポールでパイズリしろ。命令だけ変態艦長さん」

「は、はい♥ おっぱい押し付けて上下にい……♥ あっ♥ ああん♥ ひゃあああああ

……ん♥ ポールゴシゴシ気持ちいい♥ デカおチンポに奉仕してるみたいなの♥ ああ、たまらない♥ たまらないわあ……♥」

ポールに胸を押し当てゆつくりと上下に動かす。男根を想像させる魔性の快美に脳天がジーンと痺れていく。

薔薇のような膣穴も触手と関係なく愛液でびっしょりと濡れていた。

「艦長、胸もいいですがまだみんなに見せてないところがありますよね？」

「そ、それは……」

マキムラの言葉にクラウドディアは言いよどむ。元々朱に染まっていた美貌がさらに赤みを増す。

「せっかく僕が生やしてあげたんですよ？ さあ、遠慮せずに」

「ええ、今やるわ……んう、ううううう♥」

衣装の肩の部分には取り外すことができるようにファスナーがついていた。つまみを引っ張ると袖が外れ肩と腋が露出する。

「みんなに見てほしいの……わたしのとっても恥ずかしいところ♥」

腕を上げ大きく腋の下を開く。そこにあるのは白くスベスベした腋窩ではない。ブロンドの剛毛に覆われた上にリボンで飾られたジャングルだ。

そう、クラウドディアはボウボウに生やした腋毛をリボンで可愛らしくまとめることを強制されていたのである。

「か、艦長なにをやっているんですか!？」

「ハハハ! スケベな毛が丸出しじゃねえか!」

「みつともないなあ。処理してないわけ?」

「やつ……いやあん♥ そんなこと言わないで♥ いじわるしないで♥」

爆笑に混じって正常な乗組員から驚きの声上がる。身を焦がす恥辱で泣きそうになりながらもアイドルのように幼い声を上げる密林艦長。

グリードの媚薬は成分を変化させることで成長を促進もできた。普通なら絶対他人に晒すことのない恥部を見られ、息をすることも苦しい。

(見られてる……わたしのみつともない姿を見られちゃつてる……。も、もう消えてしまいたい……)

戦艦アルタイルの艦長として積み上げてきた信頼や、自身の矜持が崩れ落ちていく。卑猥なアイドル衣装で身体をくねらせるたびに心が死んでいく様を感じる。

だが、どれほど惨めな醜態を晒そうとも調教者の命令には逆らえない。

「スケベでしょわたしのわ・き・げ♥ ボーボーで匂いもすつごくキツいの♥ 真面目な顔して艦長席に座っていても本当は腋毛でおしゃれしちゃうくらいド下品なドエロ女なの

♥ んう、ふんうううう……アフウウウウ……♥」

股を大きく開いてその場にしゃがみ、指でピースサインをつくってリボン腋窩を押し広げる。パンティまで見せつけ、痴女のように淫らな呻き声を上げる。

淫靡な色香がステージの下にまで匂つてきそうだ。

「はう、ああ……あふくううううううっ♡ みつともない腋毛美少女を軽蔑して応援してね♡ みんなの嘲笑を待っているわ♡ ふう……んふううううっ♡」

「言われなくても軽蔑するぜ。このド変態が！」

「美少女つて年齢じゃないでしょ。自分で言つてて恥ずかしくないんですか？」

「も、もちろん恥ずかしわ♡ でもこれがわたしの使命♡ 腋毛露出アイドルの活動なの♡ ぐんぐ、うううう……♡ ぐ……ぐひひひひひひインツ!! ああ……おまんこの触手動いてる♡ 気持ちいいのいっぱいくるうううう♡ ほお、んおおおお♡」

自分の言葉で熟れた身体を辱め、倒錯的な淫悦に溺れる。乗組員たちに蔑まれることが心地よくてたまらない。

膣穴の触手も緩やかに蠕動ぜんどうを始め、絶頂が近づいてくる。

「いいアピールでしたよ艦長。次は中佐の番です。どうすればいいかわかっていますよね？」

「っ……わかってる！」

仏頂面でポールダンスを続けていたエリーカは、ついに自分の番が来たのかと生唾を呑み込んだ。

自分の設定については事前に聞かされていたが、いざ大勢の前でやるとなると屈辱に血の涙が出そうだ。

（耐えろ。地球圏に到達すれば人類連合が必ず異常に気づく。そこまで何としても凌ぐんだ！）

微かな希望を胸に己を奮い立たせる。どれだけ状況が最悪だったとしてもあきらめるわけにはいかない。

そして、薄桃色の唇が決意を込めて開かれた。

「にゃ、にゃっはろーん☆ みんなの妹エリーカにゃんだよー！ 私の得意なエロダンス、いっっぱい見てね♥」

だれよりも規律に厳しくアルマイルで最も恐れられる鬼のエリーカの痴態。普段の彼女を知る者からすればあり得ない猫撫で声に乗組員たちは沈黙し、一瞬置いてからけたたましい笑い声が巻き起こった。

「アッハハハハ！ 頭おかしいんじゃないかねえの！」

「中佐ってそんな趣味だったんですね。幻滅しました……」

「どの面下げてにゃんとか言ってるんだよ。恥を知れ恥を」

「くっ……貴様らっ！」

煉獄のような怒りを込めギャラリィを睨みつけるが、今の姿では威厳も何もない。むしろネコ耳スクール水着の滑稽さを強調するばかりだ。

女性乗組員の冷たい眼差しに耐え、歯を食いしばって続きのセリフを口にする。

「そんなこと言わないでほしいにゃん♥ んう……あ、ふああああああん♥ お兄ちゃんいじわるしないでえ……♥ やさしくしてくれたらおっぱいもおまんこもアナルだって好きにさせてあげるから♥ うう、くふううううう……ん♥」

手首をくつつけて顔の前に置き、片足を上げるブリッ子ポーズで観客を誘惑する。アナルバイブの振動に合わせてネコの尻尾が可愛いらしくはねた。

張りのあるお尻やスラリとした脚線美が視線を集める。

「今からエリーカにゃんの魅力をいっぱい教えてあげるにゃん♥ ほら、クラウディアちゃんほどじゃないけど胸も大きいでしょ？ おっぱいムニムニ♥ ムツムニ♥ あん、ん、んふううう……♥」

「中佐のカップはいくつなんですか？」

「え、Fカップだにゃん♥ 揉みやすくって吸いやすいお手頃サイズ♥ もちろんパイズリ

だつてオツケーだにゃん♥ にゃふ、ウ、あうううう……♥

ゼッケンの貼られた双乳を揉みしだき男たちの欲情を煽る。ネコのような語尾でしゃべっていると、自分が獣になつたような錯覚さえ覚えた。

乳首も痛いほどに勃起し淫らな声が漏れ出ていく。

「お尻だつてエッチにゃん♥ 触手とアナルパイプでトロトロになつたケツマンコ♥ エリーカのマゾヒップをいっぱい見て変態だつて笑つてほしいにゃん♥ にやう、ウウツウ、ふくうううううううう……ん♥」

エリーカは四つん這いになるとお尻を持ち上げ乗組員たちに見せつけた。紺色の布地に包まれた双臀はむしゃぶりつきたくなるほど魅惑的だ。

クロツチの間からはいやらしい匂いの肛液が湧き出してくる。

「ふぐ、にゃふぐうううううう♥ 私のケツ振りダンス見て見てえ♥ はい、ふりりふり♥ ふりりふり♥ にゃぐ、ふにゅあああ……♥」

「へへ、本当にみつともねえな。おらつ、もつとエロケツアピールしてみろよ!」

「んにゅ……クウウウウウウウツ♥ んっ……こ、こうかにゃん? お尻の形がはつきりして全裸よりも恥ずかしいにゃん……」

股布を引き絞り真っ白な尻タブを晒す。パイプで広がった肛華やピンク色の淫裂もハミ

出し、かなりみつともない姿だ。

そこに視線が集中していると思うと、火にくべられたように体温が上昇する。

「あぐ……ふぐううううううううつ！ バイブがもつと食い込んで……こ、これキツイにゃん……はあ、ああああああああああつ♥」

「スク水を引っ張ってオナニーまで……中佐最低っすよ……」

「んぐっ♥ グ……くううううう♥ お股ゴシゴシするの気持ちいいにゃん♥ つ……、んぐウウウウウウウウ♥ これクセになる……♥」

股布を前後に動かし淫悦を貪る。悪夢のような体験をしているのに媚薬改造された肢体は悦び、直腸壁と膣粘膜が蠢動する。

エリーカは身ぶるいに襲われ秘部からは快楽液が漏れ出ていった。

「にゃう、ふにゃああああ……！ お兄ちゃんたちに見られて感じちやううう♥ 気持ちいいのがずっと続いているのお……♥」

「へッ、オレの妹がこんな変態だなんて知らなかったぜ」

「変態でごめんなさいにゃ♥ エリーカはスケベなコスプレして男の人を誘う淫乱にゃの♥ ンう、にゃふうううううううん♥」

爪を立てるネコのようなポーズを取り、四つん這いでステージを歩く。怜悯の光を宿し

た瞳は悦楽で蕩けつつあった。

(どうして私がこんなことを……つ、それもこれもあのクズのせいだっ！ くう、また股間が疼いてえ♥)

血が滲むような屈辱に耐え演技を続ける。時間が経つにつれてバイブと触手の蠢動は激しくなり、性器と化した直腸壁が快美を求め。

何度も味わった媚薬アクメが再び迫ってくる。そして、それはエリーカの上官も同じであつた。

「わ、わたしもう限界なの……イキたくてイキたくてたまらない……くう、ンウウウウウウウウウウ♡」

「クラウディア様、しかしショーの途中で絶頂するわけには……」

マキムラの指示なしにイクことは許されず、一人は押し寄せてくる快楽に翻弄される。触手による蠕動愛撫で理性が崩壊しそうだ。

「どうしましょうかねえ。ここで『おねだり』してくるなら考えてもいいですが」

「い、いいわよ。やってあげるわ！」

「んう……仕方がないにゃ」

口では嫌がる素振りをしていても身体の疼きは抑えられない。声を出すだけでも強烈な

快美に襲われ、股座から淫蜜を漏らしてしまう。

フタナリ肉竿もフル勃起し、許されるなら浅ましく両方の恥部を指でかき回したい。

「ど、どうかこのド変態アイドルクラウディアにアクメをください♥ 触手バイブで感じる腋毛丸出しのマゾ雌に情けない姿を晒させて♥ ふう、んうううう…はうウウウウウウ~~~~ん♥」

「エリーカにやんのけものケツマンコ♥ ハメハメすることしか考えてない雌穴をイカせてほしいにゃん♥ 私の最っ高に無様なネコアクメを見せてあげるにゃん♥ にゃう、にゃはははあ~~~~ん♥」

クラウディアは両腕を上げリボン腋毛を晒しパンティを見せつけた姿を、エリーカは子猫のようにポールに身体を預け、背筋を反らした姿勢を見せつける。

乗組員たちの嘲笑と呆れたような視線を受け、火照った身体がさらに昂る。

「まあよしとしておきましょうか。お望み通りイカせてあげますよ」

「ふぐつ!? はぐううううううう!! あひゃあああああ~~~~ん♥」

「ヒツ…ひぎいつ!? ニヤ、にやぐううううううう~~~~♥」

マキムラの命令に従い秘裂と肛華の触手が全力で抽送を開始する。タコの足に似た触手が身体の中を縦横無尽に動き回り、鮮烈な快美を伝えた。

常人なら痛みと異物感で発狂してしまう責めでも、媚薬で調教された身体にはシロップのようにスイートで心地よい。一秒も待たず絶頂感が押し寄せてくる。

「イク♥ イクイク♥ 腋毛アイドルイッちゃうウウウウウウウウウウ〜ッ♥」

「イク、イクにゃん♥ ネコ耳スク水アクメしゆるにゃあああああああん♥」

クラウディアは腋窩から淫らな匂いを発散させ、エリーカはネコのように鳴きながら絶頂を迎える。目の前で無数の星が瞬いた。

ズジュ♥ ジュググ♥ ゴチュゴチュゴチュ♥ チュグ、グチュチュウウウウウウウウウウウウ〜ッ♥

「おへえええええええんっ♥ イグッ♥ 触手パイプでおまんこイックううううううアイドルなのに腋毛晒してマジイキしゆるうううううう♥ いい歳してひらひらピンク衣装でアクメしゆるのおおおおお♥ ほお、んおっ!! しよ、触手出てきちゃうううううう〜ッ♥」

「にゃん♥ イクにゃん♥ イクにゃんにゃん♥ スク水スケベボディでビショビショにしながらエロ顔アクメ♥ お兄ちゃんたちの前でケツアクメ♥ お尻の穴で感じちゃうにゃん♥ ふにゃ、にゃあああ、ニヤフウウウウウウウッ!! 触手這い出てくる!! あ、ううう……♥ 触手お漏らししながらイッちゃうにゃああああああ♥」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

UN COMIC
アンソリアル

**敗北乙女
エクスタシー**
敗北乙女エクスタシー



あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

新刊 姫騎士

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!

小説家になるこの男性向けサイト「アークターシンノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!



リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル

フリーダム120%!? ジャンルにとわれないドキドキラブ!

ドキドキラブ

二次元ぷち文庫



二次元ドリーム文庫